

# ペンバリーからチャッツワースへ

——英国流「人とすみか」——

村 瀬 順 子

はじめに

『方丈記』（1212）の冒頭で、鴨長明（c.1155～1216）は人生の無常を移ろいゆく川の流れや生まれては消える水の泡のはかなさにたとえて、次のように表している。

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と栖と、またかくのごとし。（中略）

また知らず、仮の宿り、誰がためにか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。その主と栖と無常を争ふさま、いはばあさがほの露に異ならず。或は露落ちて、花残れり。残るといへども、朝日に枯れぬ。或は花しほみて、露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つ事なし。<sup>1</sup>

鴨長明は、家とははかない人生を過ごすための「仮の宿り」に過ぎないものであって、豪華な家を建てようと一喜一憂するのは愚かなことである、家もそこに住む住人も無常をあらそう様子は、朝顔とその上に落ちた露に等しい、と述べている。このように人の命とすみかを等しくはかないものとする無常観は、平家の没落という歴史的事件もさることながら、当時、相次ぐ火災や竜巻、大地震などの天変地異に見舞われ、多くの家屋や人命が失われるのを目の当たりにした著者自身の体験からくるものであっただ

## 2 (村瀬)

ろう。

現代の日本の住宅は、鴨長明が生きていた鎌倉時代からすっかり変わってしまい、比ぶべくもないように見える。しかしながら、私たちの住宅に対する思いや意識・感覚はどうだろうか？ 表面上は大きく変わっているように見えても底流には変わらない部分があるというのが文化というものの特質ではないだろうか。家をはかない人生を生きる「仮の宿り」と捉える感性は私たちの中に今もどこかに残っているのではないか、という疑問を頭の片隅に置きつつ、イギリス文化における英国流「人とすみか」について考えたい。

本稿では、イギリスに住む一般の人たちの住居ではなく、イギリス特有のものとして、カントリー・ハウス (country house) と呼ばれる、貴族及び地主階級の人たちが地方に所有している先祖伝来の屋敷を取り上げたい。カントリー・ハウスは総称であり、マナー・ハウス (manor house、荘園領主の館) という名で呼ばれることもある。実際には、リトルモートン・ホール (Little Moreton Hall)、ハイクレア・カッスル (Highclere Castle)、ブレナム・パレス (Blenheim Palace) のように固有名詞で呼ばれており、他には〇〇パーク (Park)、〇〇コート (Court)、〇〇アビー (Abbey) といった名前がつけられたものもある。イギリスにはそうしたカントリー・ハウスが今なお 1500 から 2000 ほど残っているとされている。<sup>2</sup>

ここではまず 18 世紀イギリスの小説家ジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) の『高慢と偏見』 (*Pride and Prejudice*, 1813) に登場するペンバリー (Pemberley) の館がどのように描かれているかを検討した上で、そのモデルとなったチャッツワース (Chatsworth) と呼ばれるカントリー・ハウスへと話を移していく。チャッツワースは 16 世紀から現在まで、デボンシャー公爵 (Duke of Devonshire) 家が所有するカントリー・ハウスで、今では一般公開され、年間 70 万人もの人々が訪れる人気のカントリー・ハウスとなっている。今日の発展をもたらした功労者として、特に第 11 代デボンシャー公爵夫人に注目し、彼女の奮闘ぶりについて見て行くこと

で、英国流「人とすみか」について考えたい。

# 1. 『高慢と偏見』に描かれたペンバリーの館とその主人

ジェイン・オースティンは、ジェントリー（地主）階級を中心とする地方の人々の社交生活を鋭い人間観察に基づいて描き、若い女性の結婚をテーマとして、ユーモアとアイロニーに溢れる小説6作品を残している。作品は何度も映画化され今なお根強い人気を保っているが、その中で最もよく知られている作品『高慢と偏見』は、地主階級であるベネット（Bennet）家の5人姉妹の結婚をめぐる展開する物語である。そこに登場するダーシー氏（Mr. Darcy）はペンバリー館と呼ばれる立派なカントリー・ハウスに住んでいる。主人公である次女のエリザベス（Elizabeth）は、ダーシー氏の求婚を一旦は断るが、自分の判断が彼に対する偏見と誤解に基づいていたことに気づいたことと、その後のダーシー氏の振舞いや行動によって次第に彼に対して好意を抱くようになり、最終的に二人は結婚する。

物語の中盤、ダーシー氏の求婚を断ってからまもなく、エリザベスは、叔父・叔母であるガードナー（Gardiner）夫妻に誘われて旅に出る。途中、ダーシー氏の邸宅であるペンバリー館が近いことがわかり、叔母が見学したいと言い出す。エリザベスは躊躇するが、ダーシー氏が不在だと聞いて、ようやく承知する。エリザベスは、周囲を森に囲まれて建つ石造りのペンバリー屋敷を眺めたとき、自然の美しさを生かした趣味の良さにまず感動を覚える。

それは大きな美しい石造りの建物で、高い地面の上にしっかりと建ち、樹木のよく茂った高い丘を背にしていた。建物の前には、自然な威容をそなえた一筋の流れがさらに立派に、しかし、わざとらしくない姿を見せていた。川の土手は自然で、間違った装飾をほどこされてもいなかった。エリザベスは喜んだ。彼女はこれまで自然がこれほど建物を引き立て、しかも自然の美がへたな趣味で壊されていない場所を見

#### 4 (村瀬)

たことがなかった。彼らはみな熱心にほめたたえた。その瞬間、彼女はペンバリー館の女主人になるということはすばらしいことかもしれない！と思った。<sup>3</sup> (拙訳)

一行が見学させてほしいと告げると年輩の家政婦が屋敷内を案内してくれるが、ここでもエリザベスは、その家具調度品の趣味の良さに感心する。

どの部屋も天井が高くて美しかった。そして家具は持ち主の財産にふさわしいものだった。けれども、エリザベスは、それらがけばけばしくもなく、いたずらに立派でもないこと——ローズィングズの家具より華美ではないけれど、よりほんとうの上品さがあることを見て取り、彼の趣味に感心した。<sup>4</sup> (拙訳)

ローズィングズ (Rosings) とはダーシーの叔母で虚栄心の塊のようなキャサリン・ダ・バーグ夫人 (Lady Catherine de Bourgh) の屋敷の名前である。その屋敷がこれみよがしに華美に飾り立てられているのに対して、ペンバリーには本当の上品さがあるとエリザベスは感じる。ここでは、家具調度の趣味の良し悪しが、そこに住む住人の人柄や人間性を表すものとして捉えられている。

さらに、家政婦のレイノルズ夫人 (Mrs. Reynolds) は、主人であるダーシー氏について、「貧しい人にも思いやりがあり」「地主様としても、御主人様としてもこの上ない方」であると褒めちぎる。レイノルズ夫人の話聞いたエリザベスは、画廊に飾られているダーシー氏の肖像画を見つめながら、彼の人柄をこれまでよりも広い角度から改めて見直すようになる。

もののわかった召使いの賞賛ほど価値のある賞賛がだろうか？ 兄として、地主として、主人として、どれだけ多くの人々の幸福が、彼の保護の下にあることであろう、と彼女は考えた——どんなに多くの喜

び、あるいは苦痛を、彼は与えることができることだろう！　どんなに多くのいいことでも悪いことでも、彼によってなされるにちがいないのだ！　家政婦の意見は、どれも彼の人柄をよく見せるものであった。エリザベスは、彼の姿が描かれ、彼の眼がじっと自分を見ているキャンバスの前に立ったとき、自分に対する彼の好意が、今までに感じたよりも深い感謝の念をもって思い出されてきた。<sup>5</sup> (拙訳)

カントリー・ハウスの所有者は、屋敷だけではなく、周囲に広がる広大な土地を管理する地主としての責任を持っている。エリザベスが、「どれだけ多くの人々の幸福が、彼の保護の下にあることであろう……どんなに多くの喜び、あるいは苦痛を、彼は与えることができることだろう！」と考えたように、屋敷で働く多くの使用人や小作人たちの生活はすべて地主の肩にかかっている。地主は、正に一国一城の主としての地位にあると言えるだろう。イギリスには上流階級に課される「ノブレス・オブリージュ (Noblesse Oblige)」と言われる考え方・理想がある。それは「高貴な身分は義務を伴う」という意味で、上の階級の者は単に安逸にその富と権力を享受するのではなく、その社会的地位に見合う義務や責任を果たすべきであるという考え方である。ここでは、多くの小作人や使用人に対して立派に「ノブレス・オブリージュ」を果しているダーシー氏の姿が示されている。

こうして、この作品の中でペンバリーへの訪問は、エリザベスがダーシー氏の人間性をより広い社会的角度から見直す契機となり、エリザベスの中で次第に彼への愛情が芽生えていくターニング・ポイントとなる。屋敷は、社会的地位と権力の象徴である以上に、そこに住む人の人柄と人間性を映す鏡としての意味を与えられていると言えるだろう。ペンバリーのモデルになったとされる実際のチャッツワースの館とその住人はどうだろうか。次に、デボンシャー公爵家について見て行きたい。

## 2. ペンバリーからチャッツワースへ

『高慢と偏見』の中でペンバリー館の主人であるダーシー氏は貴族ではなく、ジェントリーと呼ばれる地主階級に属し、年収一万ポンドの大金持ちであるという設定になっている。エリザベスの父ベネット氏もまたジェントリー階級であるが、こちらは年収二千ポンドなので、同じジェントリーといっても大きな差があることがわかる。

作中のペンバリー館は実在するチャッツワースをモデルにしているとされている。チャッツワースはデボンシャー公爵家の屋敷であり、現公爵は第12代に当たる。森護氏によると、イギリスには王族の公爵を除いて26公家があり、デボンシャー公爵は序列では第8位の高位にある。<sup>6</sup> 序列は格式であり必ずしも財力の差ではない。例えば序列では第6位のセント・オールバンズ公爵(Duke of St. Albans)などは屋敷も財産も失い、現在はロンドンで借家住まいだそうである。<sup>7</sup>

それはさておき、『高慢と偏見』の中で、作者オースティンがダーシー氏を貴族ではなく、ジェントリーの地位に留めたのは、同じジェントリー階級出身のエリザベスの結婚相手として、釣り合いのとれる範囲に設定する必要があったからではないだろうか。というのは、例外もあるが、貴族は地位や財産を基準に貴族間で縁組をすることが通例であったからである。また、ジェイン・オースティンは自分が知らないことは決して小説の中で描かない作家であり、作品に出てくるのはせいぜい准男爵までである。貴族は公爵から男爵までであり、准男爵は厳密には貴族に入らない。

さて、チャッツワースはイングランドの中央にあるダービシャー州(Derbyshire)の森に囲まれた地にある。これを最初に建てたのは、エリザベス朝においてエリザベス1世に次ぐ財力を持っていたとされるエリザベス・ハードウィック(Elizabeth Hardwick, c.1527-1608、通称ハードウィックのベス)という人物である。<sup>8</sup> 4度結婚し、未亡人になる度に土地や財産を増やしていった。二人目の夫であったウィリアム・キャベンディッシュ

(William Cavendish, 1505-1557) は、ヘンリー 8 世の下で要職につき、王の修道院解散によって恩恵を受けた人物の一人であった。ベスは夫を説得してダービシャーの広大な土地を買い、そこにチャッツワースを建てたとされる。彼女が亡くなったときには、チャッツワースだけでなく、ハードウィック・ホール (Hardwick Hall) と他に 2 つの屋敷を所有していたという。このキャベンディッシュとの間に生まれた 6 人の子どものうち、次男が後を継ぎ、子爵ついで伯爵に叙せられ、デボンシャー伯爵と名乗った。このデボンシャーという名前はデボンシャー州とは関係がなく、名前の由来は不明であるらしい。その後、2 代・3 代と続き、4 代目が名誉革命における功績により公爵に叙せられ、初代デボンシャー公爵となった。この初代デボンシャー公爵が、チャッツワースの大改修にとりかかり、当代一の建築家ウィリアム・トールマン (William Talman, 1650-1720) を雇い、当時の建築技術の粋を尽くして今に残る豪壮で優雅なチャッツワースを築き上げ、同時代の小説家ダニエル・デフォー (Daniel Defoe, 1660-1731) は「世界で最も心地よい庭と最も美しい宮殿 ('the most pleasant garden and the most beautiful palace in the world.')」と評したとされている。<sup>9</sup>

5 代目公爵は、18 世紀末、初代スペンサー伯爵ジョン・スペンサーの長女で、故ダイアナ妃の先祖にあたるジョージアナ・スペンサー (Georgiana Spencer, 1757-1806) と結婚したことで知られる。彼女は魅力的で当時のファッション・リーダーとして社交界の人気をさらい、女性に選挙権がまだ認められていない時代にあって、ホイッグ党の政治家の選挙活動を応援したり、また、大のギャンブル好きだったと言われている。しかし、公爵とは後継ぎを産むための愛のない結婚であった上に、親友であるエリザベス・フォスター (Elizabeth Foster, 1758-1824) が公爵の愛人として屋敷に住むことになったため、奇妙な三角関係に耐え続けなければならなかった。ジョージアナについては『ある公爵夫人の生涯』(原題は *The Duchess*) として映画化され、ケイラ・ナイトレー (Keira Knightley, 1985-) が好演している。ジョージアナが生んだたった一人の男子ウィリアムが 6 代目公爵となるが、

皮肉なことに彼は生涯独身だったため、「独身公爵」(the Bachelor Duke)と呼ばれた。しかし、彼はチャッツワースの屋敷と庭をこよなく愛し、屋敷の隅々にまで彼の温和で慈悲深い精神が行きわたっていると第11代デボンシャー公爵夫人は記している。彼がその才能を認め、庭師として雇用した23歳のジョゼフ・パクストン(Joseph Paxton, 1801-65)は、後に大英博覧会会場として水晶宮(Crystal Palace)を設計することによって世に認められ、下院議員にまで出世した。また、屋敷と庭を広く共有したいという思いから見学者を受け入れたのも6代目公爵である。5代目公爵とジョージアナも屋敷を時々公開したと言われており、オースティンは恐らく5代目あるいは6代目公爵の時代にチャッツワースを訪れたことがあり、それが『高慢と偏見』におけるペンバリーの館に反映されているものと思われる。

話は少し飛ぶが、時代が下って第10代公爵の頃、彼の長男ウィリアム(William Cavendish, 1917-44)が第二次世界大戦で戦死する。それは、後のアメリカ大統領ジョン・F・ケネディ(John F. Kennedy, 1917-63)の妹キャスリーン・ケネディ(Kathleen Kennedy, 1920-48)との結婚がようやく叶って、わずか5か月後の出来事だった。キャスリーンは駐英イギリス大使だった父とともにロンドンに滞在中にウィリアムと知り合い恋に落ちたと言われている。公爵家に生まれたウィリアムはイギリス国教会(プロテスタント)、ケネディ家は熱心なカソリックだったため、特にキャスリーンの母は二人の結婚に猛反対したようだが、それを押し切ってようやく実現した結婚だった。にもかかわらず、戦争という苛酷な運命が二人を引き裂いた。貴族に期待される「ノブレス・オブリージュ」はまずは政治と軍務とされ、貴族の子弟が率先して軍隊を志願した時代でもあった。24歳にして未亡人となったキャスリーンは、その後、一旦はアメリカに戻るが、再びイギリスの友人たちのもとへ戻り、人気者で求婚者も絶えなかったようだ。しかし、4年後の1948年、再婚を決めた相手とともに飛行機事故で亡くなってしまう。

次男アンドリュー(Andrew Cavendish, 1920-2004)は、兄のウィリアムより



も先にデボラ・ミットフォード (Devorah Mitford, 1920-2014) と結婚していたが、兄のウィリアムが子どもを遺さずに亡くなった時点で、公爵位を継ぐ立場となる。但し、それはまだまだ先の話になるはずだった。ところが、1950年に第10代デボンシャー公爵が55歳の若さで急死したため、アンドリューは30歳という若さで公爵となり、デボラも同じ30歳にして公爵夫人となった。

### 3. 第11代デボンシャー公爵夫人とミットフォード姉妹

2014年に94歳で亡くなった第11代デボンシャー公爵夫人デボラ・キャベンディッシュは、第2代リーズデール男爵 (John=Freeman Mitford, Baron Redesdale, 1878-1958) とその妻シドニー (Sydney, 1880-1963) の間に一男六女の末っ子として1920年に生まれた。<sup>10</sup> 長女ナンシー (Nancy Mitford, 1904-1958) を初めとする6人姉妹は、20世紀初頭、特に30年代から40年代にかけて、ミットフォード姉妹 (Mitford Sisters) として様々な形で世間を騒がせたことで知られている。

長女でデボラよりも16歳年上のナンシーは、自らの家族をモデルに上流階級の生活を面白おかしく描いた小説で売れっ子作家となった。二番目のパム (Pamela Mitford, 1907-1994) は田舎を愛し、最も女らしく平凡な一生を送ったため、弟や姉妹たちから「ウーマン」と呼ばれていたと言う。三女のダイアナ (Diana Mitford, 1910-2003) は自ら進んでイギリス・ファシスト党党首オズワルド・モーズリー (Oswald Mosley, 1896-1980) の愛人となり、後に彼と結婚するが、ヒトラー (Adolf Hitler, 1889-1945) と親交があったとして、第二次世界大戦中は夫とともに3年半もの間、投獄された。四女のユニティ (Unity Mitford, 1914-48) はドイツに留学し、ヒトラーを信奉するようになって、「ヒトラーの恋人」と呼ばれるほど親密な関係を持ったが、愛する母国イギリスとドイツが開戦した日にピストル自殺を図り、九死に一生を得たものの、その後は家族の介護が必要な身体となった。五女のジェシカ (Jessica Mitford, 1917-1996) は、ウィンストン・チャーチル (Winston

Churchill, 1874-1965) の妻の甥でいここにあたる共産主義者エズモンド・ロミリー (Esmond Romilly, 1918-1941) と駆け落ち結婚をしてアメリカに渡り、夫が戦死した後も留まり、マッカーシズムによる「赤狩り」を生き延びてジャーナリストとして活動が続けた。唯一の男兄弟のトム (Thomas Mitford, 1909-1945) は誰からも好かれる好青年であり優秀な軍人でもあったが、第二次世界大戦中にドイツと戦うのを避けるためにビルマ戦線を志願し、日本軍との銃撃戦での負傷がもとで戦死している。

世間を騒がせたと言われるだけあって、ミットフォード姉妹は、私たちがイギリス貴族の令嬢と聞いて思い浮かべるイメージからはかけ離れている。成人するまでのしつけはかなり厳しかったらしく、とにかく家を出て自由になりたいという思いが強く、怖いもの知らずで、思い込んだら一直線といった人生を姉妹の多くが歩んでいる。

しかし、姉たちそれぞれがヨーロッパやアメリカで正に波乱万丈の人生を送る間も、ただ一人両親のもとで田舎の生活を楽しんでいた末っ子のデボラは、のびやかで穏やかな性格に育ち、後年、ファシズムと共産主義という政治的立場の違いによって対立する姉たちの間にあって、よき仲介役を果たしたようである。長女のナンシーが妹のダイアナを危険人物として官憲当局に密告し拘束に関与したことや3年半後に釈放されたときにもまた妹を訴えたという事実を後に知ったとき、衝撃のあまり信じられなかったとデボラは回想記の中で述べているが、ナンシーがそのような裏切り行為に走ったのは美貌と知性の上で優る妹ダイアナへの嫉妬によるものではないか、と冷静かつ客観的な見方を示している。<sup>11</sup>

小説家のナンシーだけでなく、三女のダイアナや五女のジェシカも著述家として名を残しているが、デボラもまた、60歳を過ぎてからチャットワースに関連する写真集や回想録を多数出版している。特に、90歳のときに出版した『待っててね!』(Wait for Me!, 2010) は、両親も兄も姉たちもみな鬼籍に入り、ただ一人残された彼女の家族への思いがつまった回想記である。そのタイトルは末っ子として常に兄や姉たちの背中を追いかけてきた

デボラの心情を端的に表していると言えるだろう。

デボラは、当時の貴族のしきたりに従って18歳（通常は17歳）で社交界にデビューし、1941年に21歳でデボンシャー公爵家の次男アンドリュー・キャベンディッシュと結婚した。当時は第二次世界大戦中であり、ロンドンはドイツ軍の空爆に日々曝されていた。アンドリューも例にもれず、「ノブレス・オブリージュ」を果たすために王室近衛連隊（the Coldstream Guards）に志願し、結婚後も戦場に赴いていた。デボラは、義兄ウィリアムの死や同年で仲の良かったキャスリーンの死という痛手に加えて、彼女自身も相次ぐ死産や流産を経験し、戦時中の物資不足の状況下にあって、結婚当初の数年は辛い日々を過ごしたようである。ケネディ家とはその後交流があり、後にケネディ大統領が暗殺され亡くなったときには、親族として葬儀にも参列している。

#### 4. チャッツワースを受け継ぐ

兄の戦死と父の急死によってアンドリューは30歳の若さで公爵位を継ぐこととなり、妻のデボラはデボンシャー公爵夫人となるが、これは二人にとっては嬉しくない事態であったようだ。特にアンドリューには、本来は家督を継ぐ立場にない自分が公爵位を継ぐことに対する罪悪感と重い責任感がのしかかり、それが彼をアルコールに走らせる原因になったとデボラは回想記で語っている。しかし、さし当たって夫妻が取り組むべきことは、いかにして先祖伝来の屋敷を守るかという問題であった。

当時の貴族の多くは屋敷をいくつも所有していた。射撃（shooting）・狩り（hunting）・魚釣り（fishing）が貴族の三大スポーツとされていた時代、鳥の飛来する時期と場所に合わせて田舎にあるいくつもの屋敷を巡るのが恒例であったようだ。デボンシャー公爵家の暮らしは、11月から1月にかけては雉撃ちのためにチャッツワース、2～4月は南アイルランドにあるリズモア城（Lismore Castle）、5～7月の社交シーズンはロンドンの屋敷、その後、バイクウェル・ショー（Bakewell Show）と呼ばれる馬術競技会のた



庭から眺めたチャッツワース (筆者撮影)

めに短期間だけチャッツワースに滞在し、8～9月半ばまではライチョウ撃ちのためにボルトン・アビー (Bolton Abbey)、10月はやマウズラ撃ちのためにハードウィック・ホールに滞在するという生活だった。貴族の多く

が上院のみならず下院においても議席を持っていた時代には、議会の会期に合わせてロンドンに移動し、4月から8月まで (または5月中旬から7月まで)、「ダ・シーズン (the Season)」と呼ばれる社交シーズンを楽しんでいた。デボンシャー家もデボンシャー・ハウスと呼ばれる豪壮な屋敷をロンドンに所有していたが、これは1920年に売却している。田舎の生活を愛するデボラも狩りやシューティングが大好きだったようで、ブレア政権のもとでキツネ狩りが禁止されそうになったときには、キツネ狩り擁護のためのデモにも参加している。しかし、今、このような生活スタイルを続けている貴族はほとんどいないだろう。

貴族の凋落が始まったのは1880年以降とされ、その要因としては、土地価格の下落、農業不振に加えて、第二次選挙法改正以降の労働者階級の台頭、貴族をターゲットとした増税 (ロイド・ジョージの「人民予算」など) と言われている。<sup>12</sup>

1894年には土地優遇税制が廃止され、1919年には土地相続税が25%に引き上げられた。<sup>13</sup> 第9代デボンシャー公爵は、相続税対策として1926年にチャッツワース・エステイツ・カンパニー (Chatsworth Estates Company) を設立し、同じく第10代公爵も1946年にチャッツワース・セツルメン

ト・トラスト (Chatsworth Settlement Trust) を設立したが、それが有効になるためには5年が経過しなければならず、公爵はその3か月前に亡くなったため、当時のアトリー (Attlee) 労働党政権 (1945-51) のもとで後を継いだ第11代公爵夫妻は、400年以上に亘って収集された芸術品を含めて土地・屋敷すべてに対して80%の相続税を支払わなければならなかった。

アンドリユーが引き継いだとき、デボンシャー家はダービシャーにチャッツワース、イーデンソー (Edensor) の屋敷、ハードウィック・ホール、ヨークシャーにボルトン・ホール (Bolton Hall)、南アイルランドにリズモア城、東サセックスにコンプトン・プレイス (Compton Place) とロンドンの屋敷の合計7つの屋敷と広大な土地を所有していたが、アンドリユーは最も大きな屋敷であるチャッツワースを自力で守るために、54,000 エーカーの土地とチャッツワースに収蔵されていた数々の名画・稀覯本を売却し、ロンドンの屋敷を売却し、コンプトン・プレイスを賃貸に出し、さらに、ハードウィックのベスが最初に建てたハードウィック・ホールと周辺の農地をまるごと物納するという方法を選択した。その結果、24年かけてようやく相続税を完納することができたのである。

チャッツワースは戦時中の6年間、アイルランドのペンローズ・カレッジ (Penrhos College) という女子のパブリックスクールに転用されており、300人の女子学生と教員たちが寄宿していたため、内部は荒れ果てていた。先代の公爵夫妻のときに、戦後の荒廃した状況からある程度は修復され、1949年から一般公開されていたが、長男のウィリアムの死後、悲しみに打ちひしがれる先代夫妻が住むことはなかった。公爵夫妻は1959年に、近くのイーデンソー村からチャッツワースに移り住み、本格的に屋敷の修復に取り掛かる。

ここでチャッツワースの規模に触れておきたい。居住面積は、1,704,233 平方フィート (約46,500坪)、部屋数は297 (そのうち大部屋が48)、台所32、事務室21、廊下3,246 フィート (974 m)、階段17、ドア558、バスルーム26、トイレ68である。敷地面積は35,000 エーカー (1エーカーは1,200坪な

ので、4200 万坪、141.6 km<sup>2</sup>) で、これは日本の加古川市や川崎市と同じくらいの面積である。つまり、日本の中くらいの都市を個人が所有していることになる。そして、その敷地内に 3 つの村、バーズロー (Barslow)、ピルズリー (Pilsley)、イーデンソー (Edensor) と 62 の農場があり、全体はチャッツワース・エステート (Chatsworth Estate) と呼ばれている。

### 5. 第 11 代デボンシャー公爵夫人の奮闘

アトリー労働党政権の下で重税を課され、先祖伝来の土地・屋敷を手放したり、ナショナル・トラストという民間の保護団体に寄贈して維持・管理を任せる貴族が多い中で、チャッツワースのように、政府の補助金やナショナル・トラストに頼ることなく、自力で屋敷を修復・維持・管理し、広く一般に開放して、年間 70 万人もの入場者を呼び込めるほどの一大ビジネスへと発展させ成功させた例は数少ない。これほど広大な土地と屋敷を整備するだけでも大仕事である。デボラ公爵夫人は、1959 年にチャッツワースに移り住んで本格的な修復にとりかかったとき、まだ 38 歳という若さだったことが幸いした、と語っている。ここでは夫人の回想記をもとに彼女の奮闘ぶりを見て行きたい。

まず、屋敷内のインテリアは専門家に頼まず、すべて夫人が担当した。母親ゆずりのインテリアのセンスの良さと他人の趣味の中で暮らしたくないという思いが結局はかなりの経費節減につながったという。次にオレンジリー (Orangery) と呼ばれる、かつては貴族の趣味として屋敷内でオレンジなどを栽培していた部屋を改装し、記念品などを販売するギフト・ショップを作り、公爵夫人自らがカウンターに立った。そうした庶民的な気安さが夫人の魅力でもあったのだろう。チャッツワースを訪れると屋敷の隣に立派な門構えが見えてくるが、実はそれは馬車置場と厩舎である。夫人はそれらを改装してギフト・ショップやレストランをオープンした。また、自家農場で育てた牛・豚・鶏の加工品を販売するためのファーム・ショップを開設したり、動物と触れ合うことの少ない子どもたちのために教

育用施設としてのファーム・ヤードやブレイグラウンドを開設した。常に新しさを加味してリピーターを増やすために、馬術競技会やフラワー・ショーなど年間を通じて様々なイベントを企画したりもした。また、チャッ



屋敷内のペインテッド・ホール（筆者撮影）

ツワース以外に所有していた屋敷を観光客の宿泊施設やイベント会場に改装した。キャベンディッシュ・ホテル（Cavendish Hotel）やデボンシャー・アームズ・ホテル&スパ（Devonshire Arms Hotel & Spa）、デボンシャー・フェル（Devonshire Fell）、リズモア城の他、古い農家を改造したものまである。

こうした数々のアイデアは、小さい頃からイギリスの田舎で暮らし、カントリースポーツとされるキツネ狩りやシューティングが大好きで、農地で飼われている家畜や農産物に対する深い愛着を持つ彼女ならではの発想によるところが大きい。自らショッピングに立ち、観光客や村人たちとの交流を楽しみ、彼らの声を直接聞く中からヒントを得たことも多いようだ。気さくで働き者の夫人だからこそ成し遂げられたことだったのではないだろうか。

## 6. チャッツワースに見る英国流「人とすみか」

カントリー・ハウス・ビジネスに成功したチャッツワースであるが、地元への貢献という観点から見たとき、チャッツワースは地域社会と深く結びついていることがわかる。敷地面積が日本の加古川市や川崎市と同じくらいであると前述したが、チャッツワースは地元で最も多くの雇用を生み



出している最大の事業主であり、チャットワースで働く人たちの多くは敷地内に住み、一つの共同体を作っている。その雇用関係においては、人間的なつながりが重視され、何十年も働いている人や何世代にも亘って働いている人たちもいる。そこには現代社会で忘れられてしまった地域のつながりがある。

屋敷の内外で働く多くの人たちにとって公爵夫人は気さくに話を聞いてくれる相手でもあったようだ。公爵夫人自身は自分の役割をユーモラスに、‘Human Resource Last Resort’と呼んでいる。仕事上の悩みを抱えた使用人が、思い余って最後に話を聞いてもらおうと訪ねてくるのが、公爵夫人の部屋であったという。チャットワースで働く人々との家族的なつながりについて公爵夫人は次のように述べている。

チャットワースのような屋敷と土地とそこに住む人たちがいかに相互に依存し合って成り立っているかを知っている人は少ないと思います。何世代にも亘ってキャベンディッシュ家で働いてきた家族たちは、肉屋やハウスメイド、猟場番人、お針子、会計係や司書といった様々な仕事をすべて同じ雇用主のもとで探すことができるというのが伝統となっています。[中略] 自分たちのニーズに合わせる努力をしてもらえるのだということを働く人たち誰もが知っているという状況は他の大きな雇用主ではほとんどありえないことです。それが、他にはない「家族」的な雰囲気を作り出しています。私は、初対面の人たちと仕事を始めることが苦手なのですが、幸いなことにチャットワースではそれはあまりなく、とても楽な思いをさせてもらっています。ほとんどの人たちは引退するまで働き、その後は、求人広告を出すまでもなく、家族の次の世代の人たちが引き継いでくれるのです。<sup>14</sup> (拙訳)

イギリスでは、自分が所有している土地に勝手に好きなものを建てたり、利用したりすることは禁じられている。土地利用に関しては自治体が決定



権を持っているからであるが、広大な土地の所有者であるデボンシャー公爵夫妻自身が、屋敷を取り巻く広大な自然環境の保護にも力を入れており、それによってイギリスの美しい田園風景が保たれているのである。

また、イギリスには様々な慈善団体があるが、そうした地元の団体から名誉会長を頼まれることも多く、公爵夫妻はそれぞれがたくさんの団体に関わっていたようだ。デボラ公爵夫人は、子供慈善団体や婦人会、そして、農業委員会等に関わり、苦手なスピーチにも段々と慣れて行ったという。正にチャッツワースもデボンシャー公爵夫妻も地域連携の要として重要な役割を果たしていたと言えるのではないだろうか。それこそが、現代版「ノブレス・オブリージュ」のあり方なのであろう。

「イギリス人にとって家は城である」とよく言われるが、チャッツワースを通して見えてくるのは、400年もの歴史を持つ屋敷を壊さずに維持し次世代へと永遠に引き継いでいこうとする「永続性」への信念である。しかも、そこには単に伝統を守るだけではなく、時代に合わせて新しいものを積極的に取り入れようとする「柔軟性」も見られる。その柔軟性は、観光客のための施設の拡充や毎年のイベント企画にも見られるが、最たるものは、かつては働かないことこそがステータスであった貴族が働く貴族へと大変身を遂げたというデボンシャー公爵夫妻自身の「柔軟性」ではないだろうか。

さらに特徴的なことは、チャッツワースがもはやデボンシャー家という一家族のためだけに存在するものではないということであり、地域の人たちの暮らしを支え、さらに広く一般の人たちに公開され共有されるという「公共性」を持っているということである。デボンシャー公爵家にとってチャッツワースはもはや個人の所有物として意識されているものではないだろう。チャッツワースは人々が共有すべき歴史的文化的遺産であり、それを守り、後世に伝えていくことが一家の使命であると同時に誇りでもあるという意識があるに違いない。1980年に設立されたチャッツワース・ハウス・トラスト(Chatsworth House Trust)という信託会社は、「一般の人たち

のために長期に亘ってチャッツワースを保護すること」を目的として掲げている。

デボラ公爵夫人が言うところによれば、貴族たちが住む豪壮な屋敷に対する一般の人々の心情は、戦後まもない頃から大きく変わってきたという。戦後の労働党政権の下では、古い体制や貴族の特権といったものに対する人々の反発が強く、上流階級を税金でとことん絞り上げる政策がとられた。しかし、ここ数十年ほどの間に「遺産」や「環境」が改めて重要視されるようになり、自分たちの歴史的文化的遺産をともに守っていこうとする動きへと一般の人々の意識が変わってきたという。こうして、両者の意識が一致したことがチャッツワース成功の秘訣であるに違いない。

ルイス・キャロル (Lewis Carroll, 1832-1898) の『鏡の国のアリス』 (*Through the Looking-Glass*, 1871) の第2章に、「赤の女王」 (Red Queen) が、アリス (Alice) の手をつかんで「もっと速く、もっと速く」と叫びながら全速力で走る場面がある。ところが、止まってみると周囲の景色はもとのままで最初の地点から全く動いていなかったことに気づいたアリスはびっくりする。それに対して、赤の女王は「ここでは、同じ場所に居続けるためには全速力で走らなければならないの。もし、どこか他の場所に行きたければ、少なくとも今の倍の速さで走らなくちゃ」と答える。<sup>15</sup> デボラ公爵夫人は、チャッツワースを修復し維持するための日々の仕事について、この赤の女王のことばを引用し、「止まっているために全速力で走る」ようなもの、と次のように説明している。

かつては、2階の大部屋を整えたら、それを写真のように凍結保存できて、清潔にしておきさえすれば何も変える必要はないものと考えていましたが、それは間違いでした。カーテンやベッドの垂れ幕、家具のカバーやシルクの壁布は驚くほどの速さで色あせ摩耗していきます。家具や革張りは（その材料となる動物と同じように）手入れをしなければなりません。壁や天井の塗りも修復せねばならず、絨毯は古くて

も美しければ修繕し、新しくても摩耗がひどければ交換しなければなりません。一般の人たちに公開して見てもらうときに部屋を良い状態に整えておくことは絶え間のない仕



チャッツワース南正面 (筆者撮影)

事で、それが部屋の劣化を止めているのですが、外に現れるものではありません。それはじっとしているために走るようなものののです。<sup>16</sup>  
(拙訳)

屋敷を維持するための日々の仕事が目に見えないところで、実はいかに大変であるかを端的に語っている。

公爵夫人は、ともに働いてくれるスタッフへの感謝のことばを常に忘れなかったが、先祖伝来の屋敷を維持し発展させていくためには、日々の努力と周囲のサポートと、そして、「止まっているために全速力で走り続ける」覚悟が必要であろう。その覚悟と努力を惜しまなかった公爵夫人は94歳まで走り続けた。そこにイギリス文化の底力と伝統の重みを感じずにはいられない。

ペンバリーの館がそうであったように、今日のチャッツワースもまた、そこに住む人たちと一体であり、公爵夫妻の人柄や人間性を彷彿とさせるものではないだろうか。現公爵夫妻も確実にその精神を受け継いでいると思われる。

## おわりに

チャットワースのように、一家の屋敷を継承し維持して行くことが、地元  
に多くの雇用を生み出し、地域の暮らしを支え、かつ自然環境を保護する  
推進力となる、といったことはイギリス文化に特有のものであり、日本に  
は見られないものである。

さらにそこからは日本とイギリスの住宅、つまり、「すみか」に対する  
考え方の大きな違いが見えてくる。冒頭で示したように、『方丈記』を著  
した鴨長明は、「人」と「すみか」とともに「ゆく河の流れ」にたとえ、そ  
の無常を嘆じた。そこには仏教的な無常観が色濃く反映されていると言え  
るが、日本人には今なお住居をどこか「仮の宿り」とみなす傾向があるの  
ではないだろうか。明治の民法で規定された「家」制度では、個人よりも  
「家」が重視されたが、継承し守るべきものは「家系」であったり「家業」  
であって、建物としての家そのものへのこだわりはあまりなかったように  
思われる。古家を壊して新しく建て替えるということに対して昔も今もあ  
まり抵抗はなさそうだ。しかも、今ではそうした「家」の意識も希薄にな  
ってきている。息子や娘たちは都会に暮らし、何代にも亘って住み続けら  
れてきた田舎の家も老親たちの亡き後、空き家となり廃屋と化していくケ  
ースも多い。また、日本人は、中古住宅を修理して住むよりも、古家がま  
だ比較的新しくてもそれを壊して更地にした上で、そこに新しい家（多く  
はプレハブの家）を建てることを好む。100年住宅が住宅会社のキャッチコ  
ピーにはなっているが、そこに住む人の意識の中にそれが根づいていると  
は思えない。戦後の復興を急ぐ中で、官民一体となって新しい住宅ばかり  
を建て続けた結果、中古住宅が増え、空き家問題も深刻になっている。<sup>17</sup>

日本には風水害といった自然災害が多いという条件の違いもあるだろう  
し、また、材質の違いも当然あるだろう。イギリスではエリザベス朝に多  
く建てられたハーフトインバーと呼ばれる木と漆喰でできた建物も残って  
はいるが、大抵は煉瓦であったり、それぞれの土地で産出される石ででき

た建物が多い。従って、地域によって「はちみつ色」の家並みであったり、赤っぽいサンドストーンの家並みであったりと統一感のある街並みが形成されている。「三匹の子豚」の話にも出てくるように、わらや木でできた家は簡単に壊れてしまうが、煉瓦の家は壊れにくい。壊れにくいということは壊しにくいということでもあり、それ故に、古い煉瓦や石造りの家を壊すのではなく、修改築することによって利用し続ける発想が生まれるのは当然と言えば当然である。

ただ、住宅観ということで言うと、日本では自らの家を自分で修理したり、手を加えることによって維持し、ましてや次世代へと継承して行くという発想はあまりない。新しく便利なものに価値を置くがゆえに、古い家を壊して新しい家を建てることを好む日本人の住宅消費は「使い捨て型住宅消費」と言われる。住宅を永続的なものと考えていないためか、人々が思い思いの家を建てるために街並みの統一感は得られない。

それに対して、イギリスでは基本的に、既存の住宅を取り壊したりはせず、それを改修しながら住むことが多い。一般の住宅でも築60年以上の住宅が人気だという。古いものに価値を置き、古いものを壊さず修理して利用するイギリスの住宅消費は「メンテナンス型住宅消費<sup>18</sup>」と言われる。貴族の屋敷でも、維持できなくなった場合には、取り壊すのではなく、ナショナル・トラストという民間の組織に寄贈することによって相続税を免除され、屋敷の一部は居住用に使用することが可能となっている。ハードウィック・ホールがそうであったように物納の形で国家に納められた屋敷の維持・管理もナショナル・トラストに任されていることから、イギリスでは官民一体となって古い屋敷を守っていかうとする姿勢がみられる。

このように「すみか」を「仮のもの」「はかないのもの」とみなす日本と、「永遠に続くべきもの」と見るイギリスの姿勢に文化の大きな違いを見ることができだろう。但し、永遠に続かせるためには日々の努力と周囲のサポートと、デボラ公爵夫人が言うように「止まっているためにずっと走り続ける」覚悟が必要である。先祖伝来の土地と屋敷を守るために一生を

捧げたデボンシャー公爵夫妻とチャッツワースで働くことを喜びとする多くの民間人のたゆまぬ努力の結集がイギリス文化の底力を支えているのだとを感じる。

# 註

- 1 鴨長明『方丈記』（『新編 日本古典文学全集 44』所収、小学館、1995 年）、pp. 15-16。
- 2 杉恵惇宏『英国カントリー・ハウス物語—華麗なイギリス貴族の館—』（彩流社、1998 年）、p. 20。
- 3 Jane Austen, *Pride and Prejudice* (1817; repr. Norton & Company, London, 1966), p. 167.
- 4 同書、p. 167。
- 5 同書、pp. 170-1。
- 6 森護『英国の貴族—遅れてきた公爵—』（大修館書店、1987 年）、p. 273。
- 7 同書、p. 183。
- 8 チャッツワースの歴史については、The Duchess of Devonshire, *Chatsworth The House* (Frances Lincoln, London, 2002)、及び Deborah Mitford, *Duchess of Devonshire, Wait for Me!* (Picador, New York, 2010) 参照。
- 9 Deborah Mitford, *Duchess of Devonshire, Wait for Me!* (Picador, New York, 2010), p. 178.
- 10 ミットフォード姉妹については、メアリー・S・ラベル著、栗野真紀子・大城光子訳『ミットフォード家の娘たち』（講談社、2005 年）参照。
- 11 前掲、*Wait for Me!*, pp. 106-7。
- 12 山田 勝『イギリス貴族—ダンディたちの美学と生活—』（創元社、1994 年）、ロイド・ジョージの「人民予算」については、水谷三公『王室・貴族・大衆—ロイド・ジョージとハイ・ポリティックス—』（中公新書、1991 年）参照。
- 13 島崎 晋『華麗なる英国貴族 101 の謎』（PHP、2014 年）、p. 25。
- 14 前掲、*Wait for Me!*, pp. 261-2。
- 15 Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass* (1865, 1872; repr. Penguin Classics, 1998), pp. 141-3.
- 16 前掲、*Chatsworth The House*, p. 42。
- 17 中川弘子『解決！ 空き家問題』（ちくま新書、2015 年）参照。
- 18 「使い捨て型住宅消費」及び「メンテナンス型住宅消費」については、山田良治『土地・持家コンプレックス—日本とイギリスの住宅問題—』（日本経済評論社、2001 年）、p. 198 参照。

（大谷大学教授 英文学・英米文化）

〈キーワード〉英国貴族、カントリー・ハウス、ノブレス・オブリージュ